

いわゆる過疎地域の家族関係 (7)

— 家族内の将来の見通しについて —

鈴木真雄¹⁾・続 有恒 ほか 過疎研究グループ

はじめに

諺に「住めば都」という一種の諦めの気持を表わしているものがある。この諺の意味は、「住み慣れれば、どんな僻地でも住みよくなる」(広辞苑)であるが、この「住み慣れれば」という条件節が問題であって、「人間はいかなる環境にも適応できるという前提」、あるいは、逆に「自分の住んでいる場所を、都と思わなければ、自分がみじめな気持になる。それ故自分自身は、都に住んでいると合理化することもできる。自分の置かれている状況の認知は、環境によって、いかようにも変えられるという前提」などが考えられる。

いずれの前提をとるにしても、住んでいる人に対してその土地というのは、大きな外部規制力を持っているものと考えられることができよう。この外部規制力は、さまざまな水準のものがあられ、経済・社会的なもの、地域社会の人間関係、風俗習慣などが含まれると考えられる。このような土地、人間等によって生ずる規制力は、「いわゆる過疎」という現象のため、急速に弱められてきている。この過疎現象は、住んでいる人々の経済・社会生活・対人関係、習俗まで変えてしまっていることもできる。この過疎現象の底に横たわっているものとしては、続ら(1971)が、次の3点を導き出してきている。1) 生活の変貌、2) 現金追求の悪循環、3) 村の魅力の喪失である。この3点は、過疎地域に共通して根底にあると考えられ、特に調査対象とした5地域に長期間入って得られた結果である。

過疎という現象は、政治・経済・人口論の面からの接近、あるいは過疎地域に住む人々の意識調査等による接近、などによって解明が試みられているが、過疎現象が大きな社会的問題であるがため、ニュース・バリューが高く、研究者・政治家のみならず、ジャーナリズムも積極的に取り扱っている。

しかしながら、村全体の共通の問題である過疎現象が家族内でいかに語られ、いかに家族の成員に受けとめら

れているか、あるいは、それに対する措置をいかに講じようとしているか等の、表明され難い点については、ほとんど研究の対象とはなっていないように思われる。これは、資料収集の方法が、非常に困難なことによるものであると理由づけがきくかもしれないが、過疎現象が、あまりに急激で把握し難い点にもその原因があるようにも思われる。

また家族内から、過疎現象を眺めようとするならば、先祖代々の歴史の上に成り立っている家族は、親、兄弟子ども、配偶者などを含んだ一連の心理的結束・秩序が確立されており、それが成員の流出により、崩れようとしていると見ることもできよう。この崩壊は、成員各自の将来、家族の将来を規定する力を持っているともいえる。換言するならば、歴史を持った家族が、ずっと生活してきた所では、生活が成り立たなくなったと判断し居住地の変更を迫られていることであり、居住地を移すことは、先祖代々の土地であるがため、大変勇気の要ることであり、心理学、まさに心理学のみが関与できる問題であると思われる。しかも、短時間の選択行動の決定ではなく、むしろ日常生活の中で起こりつつあり、ある年月を要する慢性的な選択行動の決定であるといえるのではないか。この日常的・慢性的なストレスを引き起こす状況の下においては、離村・永住という二者択一的な行動・態度の決定ではなく、両者が常に併存していることが、考えられる。そのため、質問紙法による限られた枠の中での質問よりは、面接——比較的自由的な雰囲気の下での面接——による資料収集がより効果的である。

一方、家族という概念は、個人と、地域社会の間に位置づけられる。

そこで、家族の定義についてみると「血縁によって結ばれ、生活を共にする人々の仲間で、婚姻に基づいて成立する社会構成の一単位。「家」の旧制度の下で、戸主の統率した家の構成員。原則として戸主の親族でその家を構成する者及び、その配偶者。」(広辞苑)

これらの定義は、どちらかといえば、社会構成・あるいは成員よりみた家族であって、心理的な関係には、あまり視点が置かれていない。Ackerman, N. W. (1958)

1) 愛知教育大学助手

は、精神障害者は、病める家族より生まれるという立場より、家族を定義しようとしている。その内容は、家族全体を単一の連続体として記述し、定義し、かつ分類する必要があるというねらいから、「family group」とし、成長と経験、この相互充足の成功と失敗の経験の基本的単位であるとするものである。したがって、それはまた、疾病と健康の基本単位でもある。そして、彼は正面から家族の問題に取り組み、家族の行動と個人的行動の相関関係を確立するために、4つの留意点を提案している。それは1) 精神内過程、2) 家族成員間の相互作用、3) 家族集団全体の力学、4) 家族より大きい文化との関係である。

また Laig, R.D. & Esterson, A (1954) は、家族と狂気との関係を研究しているが、彼らはその家族の共通して横たわるものを記述することには至らず、11の家族の日常会話の記述をもとに、個々の家族についてのみ考察を加えているにすぎない。

このように流動的で捉え難い家族を研究することの難しさを、Ackerman, N. W. (1958) は述べている。「1つのパラドックスによって、家族研究の難しさは、より明確になってこよう。それは一方では単純な症例研究に準拠したり、それに依存したりすることの少ない研究をしようとする努力があり、他方には測定可能な変数を研究しようとして、家族現象の力動的な基盤を見失う場合がしばしば起っている。正確さを得ようとする要求によって、家族像から生活そのものを切り離してしまうようなやり方の研究手続きの厳密さが高められても、結局は家族現象全体の評価の正確さは損なわれてしまう」という全く、現在の心理学・社会学の弱点をついている内容である。さらに少し実践的な問題に移ると、家族を分類したり、パターンを決定することの困難さ、科学的価値が、明確でない記述概念を用いなければならぬ点などが、家族研究を難しくしている要因とも云えよう。

さらに家族研究法の確立の困難さについて、論を進めていくと、上述してきた家族研究の大半が、質問紙法・面接法を用いていることに気づくであろう。質問紙法は、表面的な面〈タテマエ〉を把握するには有効であるが、〈ホンネ〉を探るには、面接法が有効であるという観点より、家族研究がなされてきている。しかし面接法は、被面接者群の底に横たわるものを導き出すという方法よりも、被面接者の個々の特性を細部まで記述することに、その独自性が与えられてきている。だが、研究の目的は規則性の抽出であって、個別性の描写に終ることではないので、面接法による家族研究は、nomotheticな面と idiographic な面両面を担わなければならない

なる。この体系化し難い面接法を用いて、その記録を纏めたものをみても、結果、あるいは規則性の抽出よりは事実の再現を試みるというドキュメンタリーが多い。山崎(1972)は悲しい外国への出稼ぎを取り上げ、柴田(1972)は被差別部落の伝承を、山本(1970, 1971)は諏訪の紡績工場への出稼ぎの悲惨さ、喜作新道を開いた伊藤喜作の死因の究明など、被面接者、あるいは、被面接者間では、容易に表面化されない。しかも「よそ者」には絶対に漏らしてはならない事実などがその調査対象となっている。

これらの表面化され難いことは、いわゆる過疎地域に居住する人達の、地域社会の崩壊による対人関係の問題家族内・家族間の問題等についてもあてはまるであろう。このような問題は、面接法によっても充分解明されるとはいえないが、この問題を通じて、面接による研究方法の吟味を試みることは、方法論のみに固執して、何ら価値がないとする批判に対しては、過疎という問題であるがために、何らかの答を出せるものと思われる。面接による、さまざまなドキュメンタリーについて共通しているものを探ってみると、それは過去の事実的要素の積み上げにより、事実を作り上げようとするものであり、換言すれば、過去のことであって、現在のことではないのである。しかし研究——特に心理学——において問題となるのは、現在の認知、情動、将来への見通しであって過去の事実、現在の対人関係、個人の精神内容の動きを説明するため補足資料にすぎないのである。心理学の研究は、現在の心理状態が取り扱われるべきで、決してドキュメンタリーではないのである。それ故心理学的・社会的な面接法による研究においては、さらに問題が起ってくる。それは、面接の記録——文章化された会話——より、結果を抽出する時の論理・手順が全く存在していないことである。これの欠如が、面接の記録より導き出された結果は、恣意的であって、科学性に欠けるものであるという批判を引き起こしている原因であるかもしれない。この恣意的ということについて、質問紙法と面接法とを比較して考えてみると、質問紙法においては可能な限り、質問の意味を一義的にして、その反応を集計して結果を導き出すのであるから、調査以前の質問項目を作成する段階で、研究者の枠組と被調査者の枠組みが同一なものに近づけられることが必要となる。そして資料収集・整理の段階では、何ら研究者の主観の入り込む余地はないと考えられる。しかし、面接法においては面接という two way のコミュニケーションであるので、資料収集時に、研究者の枠組みと、被面接者のそれとのくい違いを是正することができ、その後記録の整

理が研究者の枠組みで行われるので、面接法が、確固とした研究法における地位を得ることができないのである。これらの数多い問題点を含めて、比較的自由的な雰囲気の下で行われた面接による研究法の吟味も併わせて行なおうとするものである。

I 目 的

前に述べたように、過疎という社会的大問題が、個人内、家族内でいかに受けとめられているかを考えてみた場合、家族の将来の行動について——永住するか離村するか——は決して、一方の極に存在するのではなく、単に永住したいと思う気持ち、もう住めない、離村せねばならぬと思う気持ちが併存しているように思われる。質問紙法による調査——永住希望、離村希望——の結果と面接結果から読みとれる将来の行動の内容を検討することにより、面接法、質問紙法のそれぞれの長所・短所を明かにすることができよう。

次には、将来の見通しについて、上記のように質問紙法、面接法という方法論上の問題に視点を置くのではなく、見通しの内容について検討を加えてみようとするものである。

家族という単位で、見通しを吟味することは非常に困難であることは、前に述べた通りであるが、やはり、家族全体として記述することがなされねばならない。そこで、本研究は被面接者の属性により、家族という単位で分類し、結果を導き出そうとするものである。そこで、過疎という地域社会が徐々に崩れていく過程の下にある家族についての面接であるので、その過疎という状況をいかに受けとめているかという点がまず第2に問題になる。決して、ムラ全体で片づけられる問題ではなく、それぞれの家族によって、置かれている状況が、一般的に非常に厳しい過疎・地域社会解体というものであっても、個々の家族の適応様式は異なっていることが予想されよう。例えば、過疎という現象が、中学卒業する若い人達の都会への集団就職という型で始まることは周知の事実であるが、この年令(中学3年)の子どもを持つ親においては、短期間に子どもの将来、ひいては親自身の老後までも判断せねばならなくなる。その迫まれる度合が大きくなればなる程、将来への見通しの時間的長さは短くなり、質においても、当面の問題の解決が、大きなウエイトを占めてくるようになり、不安が高まったり、強くなったりするのではないかと、また子ども親の職業を継いで、親と一緒に生活することが決まっている家族においては、比較的、遠い将来まで村での生活が成り立つか否かが問題となってくる。さらに子ども女子ばかりであれば、過疎により青年の不在のため、婿養子を貰

うことが、不可能に近くなり、後継ぎの問題はさらに深刻となる。現実には、あまりに深刻すぎて、解決の方法が見出されないこともあり得る。これらの予想に難くない家族内の問題は、家族それぞれに違いすぎており、過疎という状況の下での家族を一括して、青年層の離村、あるいは挙家離村として把えることは、あまりにも表層的資料の処理にすぎないのではないかと。本研究の究極の目標としては、**nomothetic**な方法と**idiographic**な方法との両者を取り入れた新しい研究法の手順を確立することになるが、現在の段階では、かなり多数の面接より結果を抽出する論理の確立のための方向づけの検討を試みる。

II 方 法

昭和45年8月より、46年8月までの1年間に長野県下伊那郡上村、山形県最上郡大蔵村沼の沼台地区、愛知県北設楽郡富山村、島根県飯石郡頓原町、熊本県球摩郡水上村における面接(調査期間、調査参加者、面接ケース、人口の推移、町勢一般、全体の印象については続ら(1970, 1971)に詳しく述べてある。)

この面接の記録は、名古屋大学教育学部教育心理学科研究資料1~6として刊行されている(1971, 1972)。および島根県頓原町における質問紙調査。

面接はそれぞれ世帯主に対して行われたものであるが世帯主が不在の場合は、その妻、あるいはその親が被面接者となった。そして比較的自由的な雰囲気の面接が行われた。

面接記録の整理の手順

1) 面接した4地域(愛知県北設楽郡富山村を除く)の面接記録(資料集1~6, 2を除く)について、将来の見通し、不安、その他さまざまな将来のことについて言語表現されたものを選び出す。

2) 島根県飯石郡頓原町における調査の中より、永住・離村のいずれを希望するか、現家業の継続・転職のいずれを希望するかの反応と、その質問に回答したケースの面接記録の中で表明されている内容との関係について検討する。

3) 家族の将来・家族の各成員の将来のことについて面接の記録の中で述べられている面接ケースをとり上げ表明されない面接ケースは除外する。そして表明されている内容を各家族ごとに取り出し、永住・離村・転職・その他、将来の行動に関する言語表現を分類・整理する。

Ⅲ 結果及びその考察

まず島根県飯石郡頓原町における42ケースの面接の記録のうちで、将来のことが、述べられている例は20列みられる。ほぼ半数である。これらは、将来の見通しについて、自発的に、あるいは面接者の質問に対する回答として表明しているのである。他の地区と比べると表1のようになる。

表1 将来に対する意見が表明された面接ケース数
対全面接ケース数

地区	意見が表明された面接ケース数 (百分率)	全面接ケース数
熊本	38例 (86.3%)	44例
島根	20例 (48.8%)	41例
長野	60例 (78.9%)	76例
山形	21例 (50.0%)	42例

この表から読み取れることは、面接によって資料を収集したため、一貫してどの面接ケースにも同じ質問を試みたという保証はないので、明確な数字で表現することはできず、収集段階での誤答が含まれているかもしれないが、比較的自由的な雰囲気の下での面接において表現されたものであり、また面接者は、面接項目を明記したカードを携えて面接したので、この数字の信頼性は決して低くないのではないかと。これを考慮に入れるならば、熊本と、長野の面接ケースは、過疎の問題を家族の状況に取り込んで、心理的負担になっているが、島根と山形の面接ケースについては、あまり深刻な問題になっていないようだ。つまり島根と山形の場合は、続ら(1970, 1971)が述べているように、島根の場合は、広島市、松江市への交流が容易で、中国山地の1町村であるにも拘らず、それほど「奥まった」という印象のない地理的条件を有している。そのため近効農村的色彩を帯びつつあるといえる。このため家族内においても、村全体のレベルと同様に、過疎現象の中にあるのではなく、深刻な問題ではないようにも思われる。一方山形については、古く藩政時代からの生活様式が、未だ残っており、過疎の問題を取り上げるには5年ほど早すぎたのではないかという印象が得られた。それにひきかえ、熊本と長野は、家族のレベルでみても、村全体からか考えても過疎の真只中にあると云える。

次に島根県飯石郡頓原町の面接ケースについて、永住・移住の希望、現家業の継続・転職希望についての質問紙調査への反応と、面接によるこの点についての言語表現された内容との関係について考えてみる(表2)

表2 質問紙の反応と面接による表現との関係

質問紙 面接	永 住	移 住	
永 住	401, 402, 406 407, 423, 426 433, 434		
?	405, <u>412</u> , <u>417</u> <u>422</u> , <u>424</u> , 427 428, 436, <u>440</u>		
離 村		404, 409, 414	計 20

数字はケース番号を示す
下線のあるケースは子どもか女子ばかり

質問紙においても、面接においても、はっきりと永住希望を表明しているのは8例であるが、永住は希望していても、家族構成一農業の見通しなどの経済的・物理的・年令的な条件を考慮に入れると、子どもについて出るより仕方がない。老人ホームへ行くより仕方がないなどと、永住希望でありながら、現状判断を加味すると、永住の希望を強く持てないケースが9例みられる。質問紙調査においての反応と、面接に表われたことのくい違いは、それぞれの方法が、方法上の違いからのみ生じているのではないであろう。そのうち下線を施したケースは子どもが女子ばかりであって、婿をとることも、家業を継がせることも非常に困難な状況にあると云えよう。そして離村を希望するケースが3例みられた。これらの結果においては、2番のグループの永住希望であるが、現状を考えれば、あまり積極的な対策を見出せない家族が、問題となってくる。9例のうちでも永住希望でありながら、転職を希望しているケース422と428。さらに積極的な方策を見出せず困っているケース440について、詳しく記述する。

・ケース番号 422 職業・農業(田畑1.25ha, 山林81ha 年令・52才, 学歴・小学校卒, 家族:妻, 2女(短大在広島, 高2程度)

- 意見: 1 永住希望……夫
2 転職希望……夫, 妻
3 生活程度の向上欲求……夫
4 町の発展の見込み無……妻

面接記録抜粋

:

Q10* 「もう少し経つと、多くの人が、外へ出て行かざるを得なくなるか?」

34**「まあそうですね、残る人は余力のある人すなわち山を持っている人とかでしょう」

35「山を持たず、年をとって残らざるを得ないのは、先は暗い」

Q11「お宅の場合はどうですか？」

36「われわれの場合迷っている。というのは、子どもが娘2人で、長女は百姓はしなないとやっているし、われわれもそれを望む所ではない。どうなるかわからないが、百姓はしないつもり」

37「次女は全く百姓はしない」

38「われわれが農業をやるうちは、やらなくてはいけないが、その先はわからない、今の所そこまで考えていない」

⋮

業(田畑0.65, 山林1.5ha) 学歴・小学卒, 家族:妻3男(21才, 埼玉, 19才, 下関, 17才, 広島), 1女(中2)

意見・1 永住希望……夫妻

2 転職希望……夫妻

面接記録抜粋

⋮

Q4「将来は長男があとをつぐのか？」

10「長男は養子に行きたいと云っているが、どうしたら良いのか？」妻の発言

11「もどりたくないものは、もどらなくてもいい」

12「自分ら百姓は小さいし、もどってもつまらんし、都会へ出てサラリーマンやれると思えば、もどってやれということはいく」

13「みんな養子にやることはだめだ。2人はこちらで嫁をもらっておかんと、自分らの都合の悪いときだけでも(病気になるたりしたとき)

Q5「ご主人の代に、村を出ることは？」

14「今のところ、ちょっと抵抗がある」

15「息子の代なら、まあ、それでいい」

⋮

18「うまくいかなければ、病院に入ったり養老院に行くことになる」

⋮

Q28「誰が後をつぐわけですか？」

62「自分は、跡をつぐ人があればよし、年寄りになったり、全部売覚悟をしている。ここにいたところで、楽なところではないので、自分の代でつぶしてしまう」

* 面接者の質問の番号

** 被面接者のこれに対する発言番号

63「家がやれないようになれば、子どもの所にでも行きます。3, 4人いるから、誰か面倒をみてくれるでしょう」妻の発言

⋮

・ケース番号 440 年令:53才 職業:教員, 商業(タバコ屋), (田畑0.3a, 山林10ha), 学歴:師範学校卒, 家族:妻(49才), 2女(高2別居, 中3)

面接記録抜粋

⋮

22「子どもに能力があれば、大学まで進学させたい」

23「教師にはなりたくないと言っている」

⋮

61「娘2人ですが、帰って来ないと思う」

62「進学希望している」

⋮

64「私の所もタバコの売上げだけでは食べていけない
Q20「娘さんの将来は？」

65「詳しくは聞いていないが、独立してやれる職業につきたいようです。親としても賛成だ」

66「女の子もばかりだと、ひとりの娘には独立してできる職業を持たせたい」

Q21「親としては永住希望か？」

67「一応そうだ。しかし娘が何か堅い職業につけば、娘の都合に合わせて出て行くことになるでしょう」

⋮

これらの記録に如実に示されているように「永住希望するが、将来どうなるかわからない。子どもの所に行きます。娘の都合に合わせて行くでしょう」という積極的に対策のたてられない家族が、その両向きをいかに解決していくかが、問題となつてこよう。過疎の問題は、行政上のレベルでは、人口の流出という問題として、取り扱われるが、実際に、その状況の下にある家族にとっては、将来の生活設計をすることが困難であることが心理的ストレスになっており、これが過疎の姿ではないか。

これらの結果から、このような比較的自由的な雰囲気の下での面接を用いる研究方法においては、面接と、質問紙調査の両者を用いることは、その利点が相乗的になり、各々単独の場合よりも、効果的な結果を生み出すのではないと思われる。つまり質問紙法においては、タテマエ、あるいは希望等が、その結果として得られ易いが、ホンネあるいは現実的なレベルの取らざるを得ない行動を知り得る可能性は面接法の方が、はるかに高い。

それ故、質問紙法で得られた大体の被面接者の反応傾向を基に、自由な面接の内容を解釈することが、もてあますことの多い面接の記録を処理し、結果を導き出す方法にはなり得ないであろうか。ただし、その場合に、質問紙法と面接法を混ぜ合わせた、systematic な面接で一度に二種の資料を得るのではなく、質問紙法と比較的自由な雰囲気での面接とは独立に行われるべきであろう。そうでなければ、決して二種の独立した資料ではないのである。

さらに第三の結果として、前に述べたように、永住、離村への態度は決して両極のものではなく、むしろ併存しているものと予想することは無理がないと述べたが、ここでは、被面接者（世帯主であることが多い）の家族のあり方によって、家族を分類し、その家族の永住・離村への態度を調べてみる。

過疎の1つの重要な点は、中学卒業時に集団就職で都会へ出ること、また世帯主の親が同居していて、世帯主の行動選択がかなり厳しく制限されることがあると考えられるので、以下に述べるような4群に家族を分類する。

Ⅳ群・被面接者は、世帯主の親で世帯主が長期間不在の家族構成。

一方面接の記録については、将来の見通しに関することを各面接ケースについて、抽出して、永住・離村への二つの側面より分類を試みる。その代表的な内容について、積極的に永住と、決めかねているもの、永住には消極的な内容、離村に対して、積極的なもの、決めかねているもの、消極的なものの3×3の分割表に示す。(表3)

そしてⅠ群からⅣ群までの各群について、各地区ごとに上述の分割表にあてはまるケースの番号を示す(表4 5, 6, 7)

Ⅰ群については、4地域ともに、ケースが少ない。これは世帯主の年齢が比較的他の群と比べて低く、核家族が少ないことによるものであろう。山形には1例もなく熊本・島根に38列中7例、20列中5例と、少ないながらも、他より多い。これは東北に比べ、西日本の開かれた過疎を示すものと考えられる。全般に永住・離村に対する態度は様々であって、積極的に永住するというケースから、積極的に離村するというケースまでであるが、「暮

表3 永住・離村に対する態度(代表的意見)

↑ 積 極 的 ↓ 離 村 ↓ 消 極 的 ↓	・ムラを出たい ・ムラを出る準備をしている ・ムラを出る準備はできている	・ムラを出たいが、土地や家があるので出られない	・両方の気持があり、決めかねている ・全く悩んでいる ・夫婦が別々の考え
	・ムラを出るよりしかたがない	・暮らせるまで暮らす ・頑張れるだけ頑張る ・養老院へ行く	・子どものうち1人を呼び戻す予定 ・1人は帰村するであろう
	・見通しは明確でない	・ムラに愛着がある ・ムラにずっと住んでいた	・長男を絶対に呼び戻す ・子どもが帰村するのを確信している
	←— 消 極 的 ————	永 住	積 極 的 ———— →

Ⅰ群・被面接者は、世帯主あるいはその妻、そして、長男が中学生まで、あるいは、その子どもが女子ばかりの時は長女が中学生までの家族構成。

Ⅱ群・被面接者は、世帯主あるいはその妻、そして、長男が中学を卒業している。あるいは、その子どもが女子ばかりの時は長女が中学を卒業しているという家族構成。

Ⅲ群・被面接者は世帯主あるいはその妻、そして、その親が同居していて、子どものある家族構成。

らせるまで暮らす」というセルの中には5例含まれている。これは自分の子どもの代では、その土地で生活を営むことは難しいと判断しており、自分の代で終えるより仕方が無いと判断しているのであろう。

Ⅱ群については、山形においては離村するというものではなく、長野においては、119, 120, 124, 125の例のように、困りはてて決めかねているケースが多い。そしてこの地区は様々な態度を有しており(76例中8例)それだけ他の地区と比べ、過疎の衝撃が、それぞれの家族に

表4 永住・離村に対する態度 I群

↑ 積極的 ↓	山形 長野 165 島根 404 熊本	山形 長野 148 島根 熊本 504	山形 長野 島根 熊本
	山形 長野 170 島根 熊本	山形 長野 175 島根 417, 423 熊本 503, 512	山形 長野 島根 401 熊本
	山形 長野 161 島根 422 熊本 501	山形 長野 島根 熊本 506, 538	山形 長野 島根 熊本 544

←---消極的---永住---積極的--->

表6 永住・離村に対する態度 III群

↑ 積極的 ↓	山形 長野 145,156 島根 熊本	山形 長野 島根 熊本 524	山形 233 長野 163,164,166 島根 405 熊本 502,513,514 519,530,533
	山形 長野 102 島根 440 熊本 525	山形 223 長野 103,126,172 島根 402,406,433 434,436 熊本 510,515,535	山形 202,211,214 217 長野 島根 407 熊本 527,531,534
	山形 長野 105, 131 139, 島根 414 熊本 528, 536 542	山形 220, 234 長野 110 島根 熊本	山形 203,207,218 230 長野 116,146,154 島根 熊本 532

←---消極的---永住---積極的--->

表5 永住・離村に対する態度 II群

↑ 積極的 ↓	山形 長野 115 島根 熊本	山形 長野 112 島根 熊本	山形 長野 119,120,124 125 島根 424 熊本 521
	山形 長野 117, 134 島根 熊本 508, 511	山形 229 長野 107,108,109 111,123,150 153,176 島根 409,426,428 熊本 522,526	山形 221,235 長野 113,118,135 167 島根 412 熊本 517
	山形 長野 127 島根 熊本 523	山形 205,227,236 238 長野 121,129,162 173 島根 427 熊本	山形 201 長野 101,106,122 133,136,137 140,149,174 島根 熊本 541,543

←---消極的---永住---積極的--->

表7 永住・離村に対する態度 IV群

↑ 積極的 ↓	山形 長野 138 島根 熊本	山形 長野 島根 熊本	山形 長野 島根 熊本
	山形 長野 104 島根 熊本	山形 長野 島根 熊本 505	山形 長野 島根 熊本
	山形 長野 159 島根 熊本 540	山形 長野 147, 152 島根 熊本 537	山形 213 長野 島根 熊本 539

←---消極的---永住---積極的--->

大きな影響を与えていることがうかがえる。一方に76例中9例のように、強く永住を希望し、生活設計を建てる家族と、76例中8例のように、「やれるまでやる」と半ばあきらめ型の家族も多い。過疎の衝撃は、家族の将来について、一方では、将来像を確固たるものとする力を持っているが、他方、どうにも決められず、「やれるまでやる」という消極的な態度へも追い込む力を持っている。

III群について目立つものは、山形の強く子どもを呼び寄せる。あるいは1人を帰すなど永住を希望する家族が21例中4例みられる。これは山形が、土地(米作)により、生活を今後も営めるという自信に基づいており、村

全体が、大体同じ態度を示している。しかし、熊本においては、親と子どもの板ばさみに合っていると思われる家族が38例中6例、3例と山形とは逆の傾向を示している。これは世帯主の代では、「自分の代で終るかもしれないが、未だ生活が成り立っていきだろうという見通しを持っていると思われる。長野はII群と同様に多様な態度を示す家族が多く、島根は「やれるまでやれる」という意見が、20列中5例あり、この家族についても、過疎の衝撃が、かなり働らいているように思われる。

IV群については老人だけの世帯主であるが、熊本については、世帯主が長期の出稼ぎに出ているもので、38例中4例と比較的高い。これらの家族の特徴としては、世

帯主が、ほぼ都会での生活の基盤ができており、いずれは年寄りには都会へ呼び寄せられる予定の家族のように思われる。これらのケースは流出予備軍と位置づけられよう。

ここで、われわれのグループでは過疎の定義をいろいろ探し求めてきたが、1つの指標らしいものが浮かび上がってきた。それは次のようなことである。過疎地は代々村中同じような生活形態を持ってきており、都会より個々の家族の、独自性は低いように思われる。それ故、過疎化ということは、それぞれの家族が、その家族の態度を持つようになることであり、将来に対する態度の多様性が過疎の進行度を示す指標になりそうにも思われる。

Ⅳ 討 論

比較的自由的な雰囲気の間接を用いる研究方法については方法論の体系化がなされていないであろう。つまり **ideographic** な方法と **nomothetic** な方法を兼ね合わせた方法の確立であることになる。まず、本研究についてみると、被面接者抽出の過程については、学舎離村を決めているような家族は、役場においては、あまり、取り上げられず、被面接者となることは殆どないであろう。むしろ除外されがちである。このような典型的な家族の間接は必要であり、この種の典型的な家族を含めた上で被面接者が40例ほど決定されるべきであろう。現実の問題としては、われわれが面接に行った家族から典型家族を聞き出し、出かけることが数回あり、その面接はかなり情報量が高いという体験にもとづくものである。

さらに質問紙法と面接法は、この情報収集については類似点が多く、二つの方法の、資料収集に関しての優劣が問題にされてきたが、両者のそれぞれの限界を考えるならば、別々のレベルの資料、たとえばタテマエとホンネの関係のような異なるものを対象として、資料収集の限界が考えられねばならない。そのためには、二種の方法が、用いらねばならぬが、独立して行なわれなければ異なるレベルの資料を得ることは難しいと思われる。

面接の内容の面からみると、長い歴史をもって、土地を相手に生活を営んできた家族が「やれるまでやる」あるいはムラを出るより仕方がないといった構えを持たざるを得ないことは、過疎の衝撃を受けている証拠であり土地を相手に生活が成り立たなくなるという不安が問題となって来るであろう。

また、決定を迫まられれば、迫まれる程、はっきりと決定することが困難になることは日常経験することであるが、今日までのように1つのムラの中で、大体同じ生活を営み、同じような信念を持って生活してきた人

達が、それぞれ、自分自身の態度を取らざるを得なくなったことは、地域共同体が心理面から、崩壊してきていると云えよう。このことから、考えられる過疎対策は、観光事業とか工場誘地ではなく、時代が変化しても土地を生活の基盤として、生計が成り立つという自信が持てるような政策でなければならない。そうでなければ、人々の心を無視した対策でしかない。

今後の問題としては、これらの過疎の真只中にある家族が、その衝撃に対して、いかに問題を処理していくかを、追跡的な研究で把握していく必要がある。これが、このような体系化されていない研究法の有効性を高めるものであると思われる。

要 約

いわゆる過疎地域に住んでいる人達への面接をすることによる、面接——比較的自由的な雰囲気の間接——を用いる研究方法の確立と、定義の困難な家族を対象とする家族研究の新得を吟味すること、そして過疎地域に住んでいる人達の心理的構造を、家族のレベルで考えてみることに本報告のねらいである。5地域での面接調査（質問紙調査も含む）を実施し、その面接の会話を文章化することにより研究の基礎資料とした。これによって次のようなことが導き出された。

- 1) 自由な面接での将来に対する発言において、それぞれの過疎地域の状況が反映されており、家族のレベルにおいても、各地の違いが明らかにされた。
- 2) 永住・離村という将来の行動予定についての面接と質問紙への反応のあり方より、二つの方法は別々のものを採っており両者が独立して実施されれば2つの異なるレベルの資料が得られるであろうということが示唆された。
- 3) 分類の困難な家族を被面接者の属性に従って4群に分け、その家族の見通しを吟味することにより、従来の人口論からの過疎の定義ではなく、家族内の将来の見通しを通して、心理学的に過疎の問題を把握することができ、心理学的な過疎の定義づけが可能であることが、ほのめかされた。

文 献

- Ackerman, N. W. (小此木啓吾訳) 1967 家族関係の理論と診断 岩崎学術出版
 (Ackerman, N. W. 1958 *Psychodynamics of family life*. N. Y. : Basic Books.)
 Laing, R. D. & Esterson, A. (笠原嘉・辻和子訳) 1972 狂気と家族 みすず書房 (Laing, R. D. &

原

著

- Esterson A. 1964 *Sanity, Madness and the family; families of schizophrenics*, London: Tavistok.)
- 柴田道子 1972 被差別部落の伝承と生活 三一書房
- 続 有恒ら 1970 いわゆる過疎地域の家族関係 (1)序報(その1) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学— 17, 47-62
- 続 有恒ら 1971 いわゆる過疎地域の家族関係 (2)序報(その2) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学— 18, 17-32
- 山本茂美 1971 ああ野麦峠, 朝日新聞社
- 山本茂美 1971 喜作新道, 朝日新聞社
- 山崎朋子 1972 サンダカン8番娼館, 筑摩書房

STUDIES ON THE INTER-AND INTRA-FAMILY RELATIONSHIPS IN THE SO-CALLED "KASO" (TOO-THINLY PEOPLED) COMMUNITIES

— Intra-Family Future Perspectives —

Masao SUZUKI, Aritsune TSUDZUKI, and "Kaso" Group

We have interviewed many families lived in the so-called "Kaso" communities during these two years. The interview was performed in relatively relaxed mood, and spontaneous out-speaking was encouraged. The purpose of this report is to establish a research methodology using relatively unstructured interview. Investigation on people's psychological structure living in "Kaso" communities would be made possible, we hope, by means of making them describe perspectives on their family's future.

The basic material of this study is the interview record written by us.

The following suggestions are derived:

1) Spontaneous out-speaking of interviewee reflected the locality of the "Kaso" community, and the intra-family relationships are restricted by the locality of the "Kaso" community.

2) Interview is often compared with questionnaire through response to the question. In this study it is suggested that two methods measured the different levels of attitude toward the changing or disorganizing "Kaso" community.

3) The psychological definition of phenomenon of "Kaso" will be proposed by our further investigation. Since the interviewee was classified in to four groups according to their attributes, the intra-family future perspectives scattered.